

諫早市小長井町地先のアサリ養殖について (密度の高いアサリ稚貝の発生漁場)

長崎県総合水産試験場
環境養殖技術開発センター 漁場環境科

はじめに

アサリは、内湾の干潟や浅海域に生息し、春先には潮干狩りでもなじみ深い二枚貝です。また、アサリは水中の有機物を餌にして、内湾の水質浄化に大きく貢献しているといわれています。このようなアサリの漁獲量(図1)は、長崎県を含めて全国的にも減少傾向にあります。長崎県のアサリ漁獲量は全国生産の1%程ですが、その漁獲量の大部分は小長井地先です。小長井地先では全国的にも先進的なアサリ養殖が営まれています。どこが先進的かと言いますと、漁場を区画ごとに各個人に割り当てて、畑と同じような徹底管理が行われている点です。小長井地先で手間を掛けて育てられたアサリは美味なことから、小長井ブランドとして流通しています。



(写真)小長井地区のアサリ漁場の一例

今回は、小長井地先がアサリ稚貝の発生が極めて高い場所であることが分かりましたので、この点についてご紹介します。

稚貝の発生時期と成長

アサリ生産を増やしたいといっても肝心の子供である稚貝がいないと、話になりません。従来から、小長井地先では、稚貝が比較的たくさんいることが知られていま

た。そこで、小長井地先で何時どの程度、稚貝がいるのかを調べることにしました。

過去の研究によると、有明海でのアサリの産卵期は春と秋の2回とされ、1年程で漁獲サイズ(殻長30mm程)になるといわれています。また、最近のアサリ研究によりますと、関東以南では漁獲サイズまで育つのは秋生まれが主体で、春生まれのアサリは育たない、といわれています。

小長井地先の場合(図2)をみてみますと、殻長1~3mmの稚貝は周年出現がみられますが、特に出現が多かったのは、平成17年度は5~9月、平成18年度は7~9月でした。アサリが冬季を除く比較的長い期間、産卵していることが考えられました。

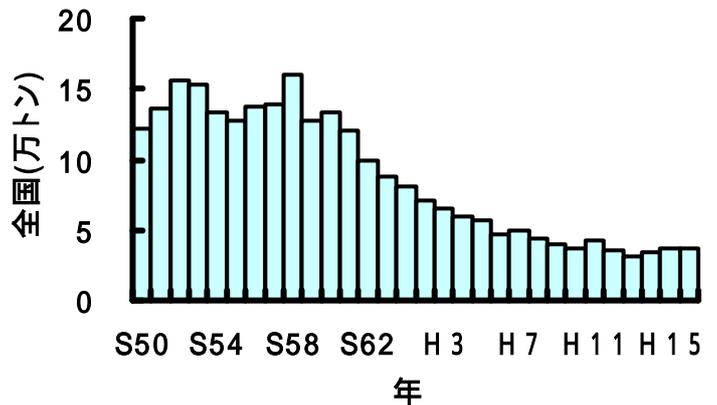


図1 アサリ類の漁獲量の変化 (引用:農林統計年報)

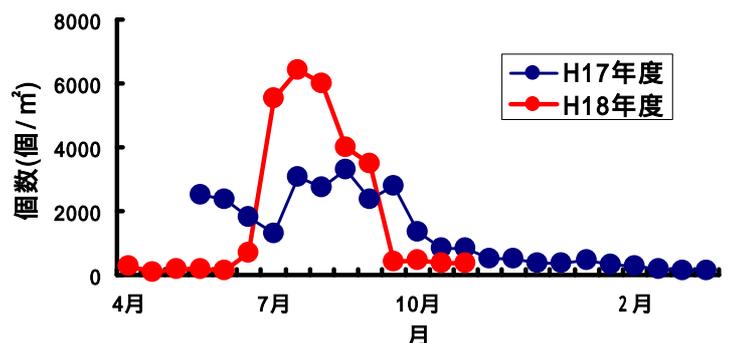


図2 小長井主漁場におけるアサリ稚貝(1~3mm)の発生量の変化

次に稚貝の成長(図3)についてですが、秋生まれ(平成16年11月頃)と推察される稚貝は、平成17年5月には3mm、8月には15mm、11月には20mmへと成長していました。また、春生まれ(平成17年6月頃)と推察される稚貝は、8月には2mm、12月には15mm、翌年3月には20mmへと成長していました。これら秋と春に生まれたアサリはその後も順調に成長しています。他県とは異なり、小長井地先では春生まれのアサリが順調に成長していることが明らかになりました。現在、殻長20mm以上の稚貝の成長に関しては詳細を分析中ですが、ふ化してから漁獲サイズ(殻長30mm以上)になるのに、春生まれと秋生まれは共に、1年半ほどかかると推察しています。

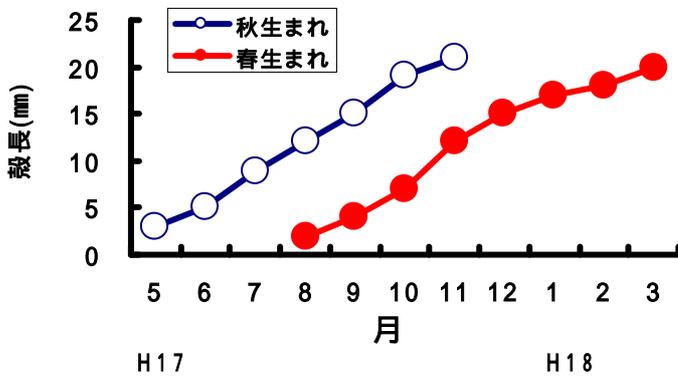


図3 アサリ稚貝の成長

稚貝の生息密度

稚貝の生息密度は漁場により差異はありますが、小長井地先の主漁場における稚貝(殻長10~20mm)の生息密度は3千~1万(個体/m²)であり、全国的にみても極めて高い生息密度であることが明らかになりました。

おわりに

小長井地先には豊富なアサリ稚貝が生息しています。しかし、生息密度が高すぎると、成長が遅くなったり、斃死を引き起こしたりする危険性があります。また、漁場内には稚貝の生息密度に濃淡もあります。総合水産試験場では、稚貝の有効利用を図るため、稚貝の適正密度とはどの程度なのかを調べる試験を漁業者の方々、漁業協同組合、水産業普及指導センターのご協力を頂きながら行っています。

小長井地先の美味しいアサリを安定的に生産できるよう、漁場の有効利用を含めて検討していきたいと考えております。

(主任研究員 水田 浩二)